

# 英国におけるフットボールの歴史に関する研究(9) ～19世紀初頭におけるパブリック・スクールのフットボールについて～

秦 修 司

## A study on History of Football in Britain (IX) —Early 19th-Century School Football—

Shuji HATA

### 緒言

19世紀初頭、英国の古い伝統的ゲームである街路のフットボールは激しい批判に会い、一つずつ消滅していくか、もしくは世論を考慮して秩序を保って行われていたが、しかし、パブリック・スクールのフットボールは教師の軽蔑が伴うだけで、発達し続けていた。パブリック・スクールのフットボールの初期の歴史についてはほとんど知られていないが、時々ヒントから、生徒達は、彼等の先輩連の意見や態度がどんなものであったにせよ、決してフットボールのゲームを止めなかったことが示されている。パブリック・スクールのフットボールは、およそ1800年ごろから世間に知れ渡ることになる。そして、その当時パブリック・スクールに在籍していた者の数名は、彼等の学生時代の回想録を執筆するなかで青春時代のフットボールについて記述しているが、19世紀初頭のパブリック・スクールのフットボールについて多くのことを知れるのは彼等によることが大きいのである。

19世紀初頭、パブリック・スクールは各々その校独自の形態のフットボールを行っていたが、それは地方の状況に従って発達してきたフットボールのゲームであった。ゲームの形式は有用なプレーイング・スペースによって大きく規定された。主として、フットボールには2つの形式があった。第1の場合、チャターハウスのゲーム、イートンのウォール・ゲーム(Wall Game)とフィールド・ゲーム(Field Game)

そしてウィンチエスターのフットボールのように、歴史家というよりはむしろ古物研究家に関心あるゲームで、それらが何かまったく独特のものになった異例の条件の下に、まったく独自に発達してはきたが、それでもまだフットボールの基本的な要素を残したままのゲームである。第2は、ウエストミンスターゲーム、ハーローのゲーム、シュリューズベリーゲーム、そしてラグビーのフットボールのゲームのようなノーマル・フットボールと称されるかもしれないゲームがあった。それらのゲームは、多分に諸々のパブリック・スクールの間であまり差異のない方法で、そして、通常の広さのフィールドで行われたが、これらのフットボールのゲームが現代のゲームの先駆であった。

本研究では、19世紀初頭、英国のパブリック・スクールにおいて各校独自の形態のフットボールのゲームが行われていたが、それらのゲームがどのように行われ、発達していったか考究していく。

### 本論

先ず最初に、フットボールのゲームとしては変則的な形態の例であるチャターハウスのゲーム、イートンのウォール・ゲームとフィールド・ゲーム、そしてウィンチエスターのフットボールのゲームについて考察する。

チャターハウスのフットボールのゲームは回廊のゲーム(Cloister Game)として知られているが、学校の敷地がロンドンにあった時代

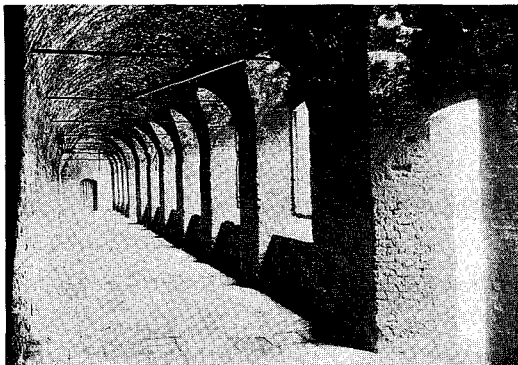
(1611—1872)に発達した。回廊は縦が70ヤード、横幅が12フィートで滑らかな敷石で舗装され、のこぎりの歯のような火打石でできた壁で囲まれていた。数多くの控え壁が突出しており、それがさらに障害となった。回廊の両端にある扉がゴールとなった。このエリアにおいて寄宿生 (Gownboys) と非寄宿生 (Rest-of-School) の試合が行われた。下級生 (fags) がゴールの中に、そして身体のかなな生徒たちが介在する空間に配列した。E. P. Eardly-Wilmot と E. C. Streatfield は Charterhouse Old and New (1895)において、チャターハウスの回廊のゲームが、その闘いにおいて極めて激しいものであったことをはっきりと示している。

回廊、すなわち床に滑らかな板を敷いてはいるが、両側は面の粗いぎざぎざのある火打石で大まかに作ったトンネル様の通路は長さ約70ヤード、幅9フィート、高さが12フィートあった。水平の鉄棒で支えられ多数の控え壁がアッパー・グリーンに向いており、大きな方形の窓があった。中央部で東と西に広がっており Middle Briers と呼ばれる小さな方形の空間を形造っていた。回廊全体は寄宿舎区域から寄宿生食堂にまで延びていた。北端には寄宿舎区域に通ずる狭い入口があり、両端にはグリーンに通ずる小さな扉があった。水曜日の午後

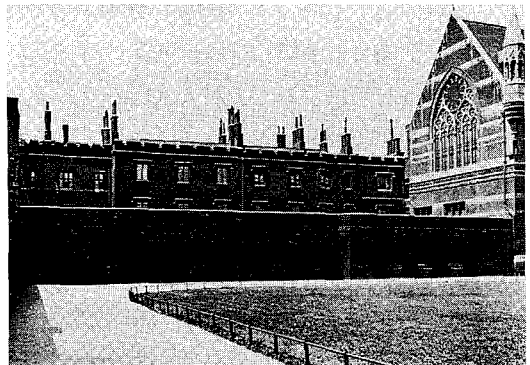
には、「下級生は全員2時半に回廊に集合とすること」という掲示が主拱道に貼り出されたものである。

寄宿生と非寄宿生の試合が行われることになっていたとしよう。指定の時刻に下級生が集合し、それぞれ20名が回廊の両端に陣取った。寄宿生の下級生が自分たちの寄宿舎へ通ずる扉のところに、非寄宿生の下級生がグリーンに通ずる南端の扉のところにという具合である。上級生は次いで回廊沿いに並びフットボールは Middle Briers から開始される。当然考えられることだがボールはすでに控え壁の1つの中に入り込む。すると50～60名程の生徒が群がり、ボールを引き出そうとして勢いよくルーージュ (rouge) を組み、蹴つとばし押し合って物すごい混乱が生ずる。器用な選手は自分の脚の前にボールがあるのを感じると辛抱強く時機を待ち、やがて好機到来と悟ると巧みにボールを引き出し、それを持って待望のゴールへへと向って回廊を猛然と突走する。すると集団はばらばらになり追いかける。

今や下級生の胆力と判断力が試される時であった。自分たちが守りを固めるゴールへボールを入れられるのを防ぐために最前列の下級生の1人はとび出してドリブルし



Charterhouse School The cloisters, inside-(N. L. Jackson, Association Footballより)



Charterhouse School The cloisters, outside. (N. L. Jackson, Association Footballより)

て来る相手の襲撃に対抗するが大抵はもんどり打って石塁沿いに5ヤードも吹っ飛ばされる。しかし、それで目的は達したのだ。というのは、味方がやがて来る時間を稼ぐだけでなく、仲間の下級生を鼓舞激励して隙間のない堅固な戦線を示せるからだ。ボールを持っている生徒がたまたま自分の寄宿舎の仲間たちに充分支援されている場合には連中は下級生の真只中へと突入し、物すごい乱闘が起こる。下級生たちはボールを通されるのを防ごうと全力を尽くし、壁のかどを手でしっかりと掴んで相手を押しやる支えを得ようと頑張る。

そういう乱闘は時として45分続いた。脛は蹴られて青痣になり、上着や他の衣類はほとんどずたずたに裂れる。そして、下級生は踏みつけにされる。しまいには、「通せ」「通せ」という猛烈な歓声の中で争っている集団のほぼ全員が床に倒れ込んでしまい、その時に乱闘でへとへとになり折り重って倒れている相手の下にボールが見つかる<sup>1)</sup>。

これはゲームの荒っぽさを誇りとした熱狂者の見方である。事実、上述の説明からするとチャターハウスの生徒はそれによって中世のフットボールのプレーヤーの荒っぽさ以外は学ぶことがほとんど何もなかったと推測すべきである。T. Mozleyは1820年代のチャターハウスでの自己の学校生活について著述した *Reminiscences* (1885) において回廊のフットボールのゲームについて

脛骨骨折は数多く起こったが、これは大部分の生徒達は非常に頑丈な靴の爪先に鉄をつけていたからで、ある者は蹴られるより蹴る方が多かったことを平気で自慢していた<sup>2)</sup>。

と記述している。回廊のゲームは実際問題、建物の内側で行われており学校当局がそれに介入しなかったのは多分に奇妙である。しかし、学校当局は自校の生徒のスポーツに対して伝統

的である18世紀の無関心を持ち続けたようであり、そしてチャターハウスの回廊のゲームは、学校が1872年6月18日に Godalming に移転した時消失した。

イートンのウォール・ゲーム (Wall Game) は特定のプレーイング・スペースに適合させたゲームのもう1つの稀有な例である。この場合ゲームの基本的な特徴である壁(wall)が建設された1717年以前にその形態でゲームが行われなかったのは確かである。フィールド・オブ・プレーは縦が120ヤードで幅が6ヤードしかなかった。一方は高い壁で制限され、もう一方は溝で制限された。又、一方の端は庭壁で、もう一方の端は白線で制限された。庭の扉とニレの木のある部分を白で区分したのがゴールであった。各々のゴールの前に仕切られたスペースがあり、一方の端は「good calx」として、そしてもう一方の端は「bad calx」として知られた。この区画がイートンの給費生 (collegers) によって、最初に利用可能になった時、彼等がその状況に適合させた間に合わせの規則によってどのようにゲームを発達させていったか想像するに難くない。しかし、時の経過とともに競技規則や競技方法は極めて細部に渡りようになったのでそれらについては、専門家以外はほとんど理解することが不可能になった。各々のサイドの目的は壁に向かって「ブリー (bully)」, つま



Eton Wall Game. A 'Bully' near 'Calx'. (The Badminton Magazineより)

り、スクリメージを何度も形成して、相手の calx にボールを入れることであった。ブリー、つまりスクリメージからボールが出るとボールは蹴られ、そしてボールが外に出て、アウト・オブ・プレーになった反対側の地点で新たにブリーが形成される。いったんボールが calx の中に入ると多彩な戦術を用いてより激しいブリーが形成されるが、その目的は、「shy (try)」をあげることである。ボールが地面から上にあり、ボールが壁と攻撃プレーヤーの脚に同時に触れて攻撃側が手でボールに触れることが可能な場合に shy がなされる。shy を得たプレーヤーはゴールめがけてボールを投げることができる。1回のゴールは shy 10回と同等であるが、shy が10回もなされるのはめったにあることではなかった。この特殊なウォール・ゲームは他の形態のフットボールと共通した特徴を持っているが、そのゲームが、ほとんどゲームのパロディであるような異例な線に沿って発達していったことが理解される。ウォール・ゲームには、ブリーを形成するメンバーが in calx の状況にある場合に彼等に適用される特殊な表現を持つ難解で独特の用語がある。ゲームは一般的には1時間行われ、ハーフ・タイムにはエンドを交代する。1820年ごろからイートンの給費生と校外下宿生 (oppidans) の間で St. Andrew's Day (11月30日) に定期戦が行われており、ウォール・ゲームはその定期戦以外、あらゆる可能性からみて消滅してしまった。

イートンのフィールド・ゲーム (Field Game) の特徴はゲームが行われるグラウンドの性格によって決定されたものではなかった。というのは、元来、イートンは数多くのグラウンドを所有しており、それらは形状も面積も様々で、様々な寄宿舎に属していたからである。グラウンドが1897年に初めて標準化され、縦が130ヤード、横が90ヤードのフィールドが公式に採用された。イートンのフィールド・ゲームは他のフットボールのゲームと同様にイートン独自に発達し、他のゲームとは際立った相違点を持つが、

血族間の似かよいを有していた。それは、11人制のゲームであった。ブリーの名で知られるスクリメージは残っているが、ブリーを形成するプレーヤーは各々のチームから4名だけであった。ハンドリングもパスすることも許されず、ドリブルで相手ゴールにボールを持ち込むのが主たる戦術である。相手ゴールにボールを蹴って入ると3点が得点される。しかし、ラグビー



Eton Field Game. (Rugby A History of the Game より)

のゲームにおけるトライに似たもう1つの得点法があった。ある状況において、ボールがゴール・ラインを越してタッチ・ダウンされたら、「ルーージュ (rouge)」の1点が得点される。次に、ルーージュを得た側にボールを「force」、つまり、ボールをブリーの中にとどめたままボールをゴールに通過させる試みの選択が与えられる。首尾よくボールをゴールに通過させることができれば2点を得る。このイートンのフィールドゲームは、特定の学校において特殊な状況が存在しないにせよ独特で独創的な経過をとってフットボールのゲームを発達させたかを示すものとして興味深い。それは、ウインチェスターのフットボールのように活動的で合理的なプレーの範囲が豊富にあり、暴力行為のない洗練されたゲームであった。このようなゲームが、すでにイートンで行われていた事実、そして特にイートンの生徒のすべてがフィールド・ゲームを行ったという事実が、1863年のアソシエー

ション・フットボールの誕生の成行きに若干の影響を及ぼしたのは確かであろう<sup>3)</sup>。

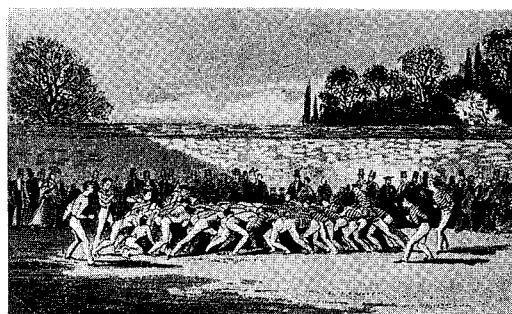
ウィンチェスターのフットボールは比較的世間から隔離して発達したゲームのもう1つの奇妙な例である。そのゲームは数多くのパブリック・スクールに共通した特徴を持っているが、しかし、その独自の方法で特徴を発展させ、そして、イートンのウォール・ゲームのように、ウィンチェスター独自の用語がある。ウィンチェスターのフットボールの場合、グラウンドは細長い長方形で、縦が80ヤードで横幅が27ヤードである。ロープによって境界がなされ、諸々のロープの外側3フィートの場所に、「キャンバス (canvas)」と称される高さ8フィートのネットがある。——初期には、生身の下級生が壁として用いられたが、ある時、キャンバスが用いられたから。興味深いのはゴールがないことである。しかし、かつては脚を開けて立っている生徒とその各々の足に巻き上げたガウンがアンパイアとゴールポストの二重の目的を果たした。ウィンチェスターでのゲームのこの面について、H. C. Adams が次のように記述している。

グラウンドは下級生を一行に並ばせて長方形に区切ったが、彼等はその全長に渡って肩を並べて立ち、ボールが外に出るのを防ぐ役をした。グラウンドの両端の中央部

には1人の生徒が両脚を開けて立ちガウンを両脚ともまくりあげていた。この生徒はゴールと呼ばれた<sup>4)</sup>。

同様に得点法は簡易化されるようになった。かつては、得点法に3種あった。第1に、ボールが生徒の脚の間もしくは頭上を通過した場合に得られるゴール——3点。第2にボールが「ガウンズ (gowns)」の上を通過した場合に得られる、「ガウナー (gownner)」——2点。そして第3に、ボールが「ウォームズ (worms)」という奇妙な名のゴール・ラインのどの部分でも越せば得られる「シット (schitt)」——1点である。現在では、ゴールが蹴られて——ある状況によるが——ウォームズの上をどこでも越してもゴールが得点される。それが適切に称されるように、「ホット (hot)」, つまりスクリメージがウィンチェスターのフットボールのゲームの中核である。ホットの背後に、「ホット・ウォッチャーズ (hot watchers)」の4名と「キックス (kicks)」の3名がボールがホットから出て来るのを待機し、ボールが出て来たらボールを蹴る。次に相手の1名がボールをキャッチしてボールを蹴るが、蹴るまでに3歩は走ることが許された。諸々の規則は規則の作成者でないものには極めて難解である。ウィンチェスターのゲームは他のパブリック・スクールのフットボールのゲームと無関係でないのは確かであるが、多分に数世紀の間、世間から離れて強い個性を発達させた極めてソフィスティケートされたゲームであろう<sup>5)</sup>。

しかしながら、チャターハウスのゲーム、イートンのウォール・ゲームとフィールド・ゲーム、そしてウィンチェスターのゲームのすべては19世紀初頭におけるフットボールのゲームの発達の主流からはずれている。他の多くのパブリック・スクールでは、多分にそのほとんどでは同じような一般的形式のフットボールのゲームが行われていたが、それは、マス・フットボールに基づいたゲームであった。プレーヤーの人数に制限がなく、数限りないメーレー、つまりフ



Winchester Football. A 'Hot' at Football. (Marples, A History of Footballより)

クリメージがあった。プレーヤーはボールを蹴ったり、手で扱うことは許されたが、ボールを持って走るのは許されていなかった。

ウェストミンスターフットボールのゲームについて、Captain F. Markham の Recollections of a town Boy at Westminster の中に、1840年代のウェストミンスターの「Green」として知られているゲームについての興味深い記述がある。

小さい連中、能無し、臆病でのろまな連中、両陣ともに12～15人程がゴール・キーパーになった。フィールド・プレーしていた者が少しでも臆病の気配を見せると追い出されてゴールに並ぶことになる。これはその日だけではなく永続的な降等であった。だが、ゴール・キーパーが巧みなセーブを見せたり、大胆なタックルを試みたりした場合には彼はただちに呼び出されてフィールドでプレーすることになり、その後常にそこでプレーしたのである……。

中央部でブリーが組まれ、ボールが両チームの間に投げ込まれる。するとボールが出て来るまで、ボールをとるため脛の蹴り合いが始まる。オフ・サイド・プレーは認められなかった。ハンドリングは許されたが、次の範囲でだけである。：地面にあるボールを拾いあげたり、2度バウンドした後拾ったりすることはできないが、完全に空中にある間なら最初のバウンドの前でも後ででもキャッチできた。

キャッチの前にチャージされ真っさかさまに倒されなければ、2～3歩進むことができ、そこで手からハーフ・ボレーでキックすることはできた。手からパント——すなわちフル・ボレーのキック——したり、拳でとばしたりすることはできない。そこには絶え間なく減茶苦茶な乱闘が見られたが密集の中では脛を蹴るのは認められ、皆多くの蹴り傷を受ける。脛当ては知られていなかった。ゴールに立っている生徒たち

は試合中、寒い思いをした。上着は着ていたが帽子はなく、手はポケットにつっ込んでいる。タイムも陣地交代もなく、ゲームが中断するのはゴールの時かキック・アウトの前だけであった。

私が入学した頃はボールを持って走るのは認められており、ボールを手を持っている時は拳によるパントも許されていた。このように走っている場合には、相手は足をひっかけたり、脛を蹴ったり、肩でチャージして倒して馬乗りになったり——ボールを奪うためには、事実上、殺人以外のどんなことでもよかった。このランニングと拳によるパントは1851年から1852年に中止されたと思う<sup>9)</sup>。

ゲームは Great Dean's Yard で行われたが、ゴールはその両端を20ヤード離れた2本の木であった。生徒は全員が参加を余儀なくされ、適当に2つの陣に分けられた。身体の小さな生徒、不器用な生徒、臆病な生徒がゴール・キーパーとなったが、彼等の手際よいかもしくは勇敢なプレーによってより活動的な役を得たかもしれない。ゲームは Green の中央において、ブリー、つまりスクリメージで開始された。「用意」の言葉でボールがブリーに投入され、ボールが再びブリーから出て来るまで「相手の向こう脛を蹴りあう試合 (shinning match)」が続いた。機会を窺っていたプレーヤーは、ボールがブリーから出て来たらボールを蹴ることが許され、そのあとボールは拳によるパントか又はノー・バウンドがファースト・バウンドでキャッチすることができた。マーカムがウェストミンスターに在学した初期のころには、ボールを持って走ることができたが、それは多分に、ラグビーのフットボールのゲームから借用した実践であったと思われるが、1841—42年に合法的になったが、それは、後に破棄された。オフ・サイドのプレーは許されなかった。つまり、これは16世紀のコーンウォールのハーリングとほぼ同じ発達段階にあるゲームであった。ウェス

トミンスターのゲームは、猛烈で生命ではないにせよ手足に若干危険を伴ったのは疑いが無い。

ハーローにおいて、ウエストミンスターのGreenのゲームと極めて類似したゲームが1830年代に行われていた。しかし、ハーローのフットボールのゲームではボールを持って走ることとボールをパスすることは禁止されていた。プレーヤーみずからがボールを持ち込んで、蹴ってゴールを通過させることによって得点ができた。ハーローのゲームにおいても、身体の小少な生徒の数多くが「ベース(base)」つまりゴールを守ったが、それは極めて辛抱のいる役であり、相手の攻撃ラッシュがあれば、通常、あお向けに転倒させられた<sup>7)</sup>。事実、その時期、校長にあった Christopher Wordsworth (1836—44) はそれらの多くを緩和するよう調停に入り、規則をベースを同時に守るのは4名のみで、30分ごとにそれを交代しなければならないとした。この時、ハーローのフットボールのプレーヤーは黒のゲートルを巻き、白いズックのズボンを着用するといったようにフットボール用の特別製の衣服を着用していた<sup>8)</sup>。

シュリューズベリーにおいても、19世紀初頭、マス・フットボールのゲームが行われていた。1798年から1836年まで校長にあった Dr. Butler の下ではフットボールのゲームは禁じられたが、ゲームは秘密裏に行われていた。しかし、バトラーの後、1836年に校長に任命された Dr. Kennedy は Cotton Hill にフットボールのフィールドを準備し、フットボールのゲームを採り入れ週に三度規則的にゲームを行った。このゲームは、下級生、つまり、「dowls」——ギリシャ語の *δοῦλος* に由来する語で slave (奴隷) を意味する——は参加を余儀なくされたので、「ドウリングス (dowlings)」として知られるようになった。上級生がこのゲームを行っていた場合、下級生がゴールに並んでいたのは疑いのないことである。1870年代にシュリューズベリーにアソシエーション・フットボールが導

入されるまでドウリングスのゲームは身体の小少な生徒のためのゲームとして行われていた。シュリューズベリーのフットボールはその原型においてラグビーのゲームに類似していたようである。というのは、「スカッシュ (squash)」として知られているスクリメージがそのゲームの特徴であったからである。ボールはキックもしくはドリブルされた。又、厳密なオフ・サイドの規則があり、フェア・キャッチによるフリー・キックが認められた<sup>9)</sup>。

19世紀初頭、マス・フットボールに基づいた類で最も有名な例で、歴史的にそれが与えてきた重要な影響に基づくものはラグビーのフットボールのゲームであった。これを例証するものとして常に引用されるのは1857年に出版されたトーマス・ヒューズ (Thomas Hughes) による Tom Brown's Schooldays である。Tom Brown's Schooldays 以前には、英国におけるパブリック・スクールについての一般的概念を形づくるそれ以上のことをなした書は皆無であったと言っても、それは多分に真実であろう。パブリック・スクールの経験のない多くの世代の少年たちは Tom Brown's Schooldays もしくはその派生書からパブリック・スクールの生活についての知識を得てきたのである。英国のパブリック・スクールについて著述している書の中でも、Tom Brown's Schooldays がパブリック・スクールのフットボールについて最初の虚構的記述をなしていると一般的には考えられている。事実、Tom Brown's Schooldays の中での School House match の記述に先だつ1851年に、あまりよくは知られていないが同様の類のゲームについての記述があった。これは、インド駐留の作者不詳のラベビー校 O B による Football, The First Day of the Sixth Match の表題の小論であった。後にその著者はラグビーの偉大な校長トーマス・アーノルド (Thomas Arrol) の子息で、マシュー・アーノルド (Matthew Arnold) の弟であるウィリアム・アーノルド (William Delafield Arrol)

であることが判明した。その小論は後に、The Book of Rugby School (1856) において、1つの章としてまとめられた。内容証拠からトーマス・ヒューズが The Book of Rugby School の書を読んだのは明らかである。2つの書の記述には、詳細な扱いや一般的な扱いにおいて類似があり、また、ヒューズのような熱狂的なラグビー校OBが The Book of Rugby School を読むのは必然的であった。従って、パブリック・スクールのフットボールの虚構的記述の連載を始め、さらに諸々のゲームについて記述するある種の方法を創始したのはトーマス・ヒューズでなくウィリアム・アーノルドであるに違いない。しかし、Tom Brown's Schooldays の存在がなかったとすれば、ウィリアム・アーノルドの影響もさ程ではなかったことは確かである。

ヒューズは1834年から1842年までラグビーに在学しており、従って彼の Tom Brown's Schooldays での記述は、その時代を真に表わしていると考えることができる。そこで記述されているゲームはウエストミンスター、ハーロー、そしてシュリューズベリーのゲームと極めて類似している。プレーヤーの人数には制限はないが、ヒューズによって記述された寄宿生 (School House) と非寄宿生 (Rest-of-the School) の試合では、各々の側の人数は極めて不均等である。というのは、寄宿生の人数は、非寄宿生の120名に対し50～60名であったからである。The Book of Rugby School において記述された The Sixth match ではその人数の不均等がさらに大きい。というのは第6学級の40名が他の460名の対戦しているからで、460名のうち200名は戦いに出るが残りの260名はゴールの中にとどまっている。Tom Brown's Schooldays での記述では、ゴール——2本の直立のポストとクロス・バーから成る——を任せられたのは身体の小さな生徒たちであり、その中にトム・ブラウンもいた。しかし、彼等は経験の豊富な上級生の監督の下に配置されている。残りは2つのカテゴリーに分類される。つ

まり、第1はスクラメージに参加する「チャージャーズ (chargers)」、 「ブル・ドッグス (bull-dogs)」もしくは「プレーヤーズ・アップ (players-up)」であり、第2は、スクラメージからボールが出て来るのを待ち受ける「ライト・ブリガード (light brigade)」であるが、それは「ドチャース (dodgers)」又は「クォーターズ (quarters)」と呼ばれる。しかし、その配置は計画性のないもので、すべてはリードする生徒のイニシャティブにかかっている。その点で寄宿生の側は有利である。というのは彼等のキャプテンである兄のブルック (Brooke) が巧みなオーガナイザーであり戦術家として表現されており、事実、彼のこれらの資質によって試合に勝っているからである。

ボールがキック・オフされて試合が開始され、そしてボールが見えるようになる時はいつでも相手ゴールに向けて蹴られるが、ヒューズがまったく明らかにしているようにスクラメージがゲームの本質であった。

しかし、見たまえ、寄宿寮の両翼にはわずかな前方への動きが認められる。兄のブルックは足早に6歩程前進するとボールはくるくるまわりながら学校側のゴールに向ってとんで行く——70ヤードとんで地面に落ちる。しかしその間に12フィートないし15フィートと高くあがったことが一度もない。模範的なキック・オフだ。寄宿寮側は歓声をあげて突進する。ボールは蹴返される。彼等はそれを迎えてすでに行動を開始している学校側の集団めがけて蹴返す。それから敵味方が接近して数分間というものある一点で猛烈にわきかえりながら大波のように動揺する生徒の群の外、何も見えない。わきかえっているところがボールのある点でそこで俊敏なプレーヤーの活動の場面であり、栄誉も得られるがこっぴどい目に逢うところである。ドサッ、ドサッという鈍いボールの音と、「オフ・サイドだ」とか、「奴を倒せ」「あいつをやっつけろ」



「万歳」とかいった叫び声が聞こえる。紳士がたよ、これが私らの言わゆる「スクラム (scrummage)」なのです。寄宿寮の対外試合での最初のスクラムは私の若い時分には決して冗談事ではなかったのです<sup>10)</sup>。

そしてまた

いま2人のブル・ドッグが未熟者の連中を駆け抜けてきた。彼等はボールを反対側に蹴出そうとしてまっすぐにスクラムの中心にとび込んでいく。彼等は本当にそのつもりで動いているのだ。君、君、あまり夢中になるなよ。君はボールを行き過ぎちまったからスクラムを通り抜けてくるとまわって自分ら側に戻ってこなきゃあとさっぱりと役に立たんという訳だ。そうら、弟のブルックがやって来た。彼は君らと同様に真直ぐにとび込んでいくが冷静さを失わない。そして、いつもボールのうしろに自分がいるようにして後に下ったり、身をかがめたりしている。そして機をとらえては猛烈な蹴りをくれている。君ら若きチャージャーよ、少しはブルックを見ならい給え<sup>11)</sup>。

その当時のスクラムの例が The Book of Rugby School において見ることができるが、その場合、スクラムに参加しているプレーヤーの人数は少ないが、Tom Brown's Schooldays

においてヒューズが記述したスクラムと極めてよく一致している(図1)。生徒の混雑したかたまりがあり、彼等の何名かは上半身が裸であるが帽子はかぶっており、彼等がスクラムからボールを出すために相手の脛を激しく蹴っている様子がうかがえる。この版画の見出しが「ハッキング (hacking)」であることに注目する価値がある。ヒューズはボールと同程度に相手の脛を狙ったこの作戦についてはできるだけ記述を少くしているようである。従って、ヒューズはハッキングを認めてはいなかったことが推測されるかもしれない。というのは、彼が Tom Brown's Schooldays を著述した1857年、ハッキングについての是非の論争が真最中にあったからである。

Tom Brown's Schooldays のさし絵入りの版では、現代のラグビーのフットボールのようにプレーヤーがボールを手にとって走っているものもある。しかし、Tom Brown's Schooldays を入念に読むと、プレーヤーは確実にフリー・キックを得ようと、時々ばボールをキャッチしてはいるが、決してボールを持って走るという記述はない。例えば、弟のブルックによるタッチ・ダウンについての記述がある。

学校側のリーダーたちは、急きょ引き返して、「ゴールに用心しろ。」と叫び、懸命にブルックを捕えようとする。しかし、彼

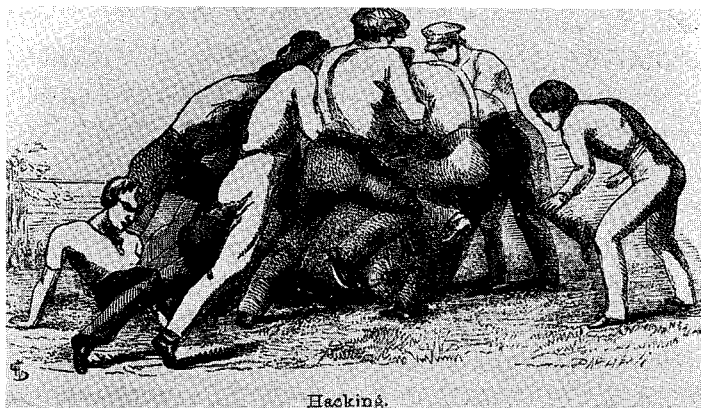


図1 Rugby Game. Hacking: a mêlée at Rugby.  
(Marples, A History of Footballより)

等の追っている人間はラグビー校随一の俊足である。彼等はまっすぐに学校側のゴール・ポストめがけて突進し、クォーターズの連中はその勢いに押されて散ってしまう。ブル・ドッグの連中は次から次へと倒されていく。しかし、弟のブルックは持ちこたえている。「あいつも倒れた。」いやちがう、幾足もよろめいたが、危険は脱した。業師のうちでも一番油断のならないクルーの一撃だった。ブルックはいまゴール直前にある。ゴールは彼の前3ヤードと離れていない。学校側の下級生が急いでその地点にかけつける。今となってはボールに向かって倒れ込むほかに手がないが、それをやろうというものが一人もない。弟ブルックは学校側のゴール・ポスト直下でそれにタッチした<sup>12)</sup>。

このあと、兄のブルックがゴール・キックを行う。そして弟ブルックにボールをゴール・ポスト直下にタッチ・ダウンされた学校側のリーダー達は、——このことは現代のプレーヤーには奇妙であるが——かんかんには憤慨してやって来て得点されるのは阻止できなかった下級生をひっぱたくのである。この一節からみて、弟のブルックがボールを蹴っているのが明らかである。というのは、ボールが「彼の前3ヤードと離れていない (not three yards before him)」と記述されているからであり、弟ブルックを阻止する唯一の方法は彼を転倒させるかもしくは現代の方法でボールに倒れ込むしかなかったのである。

しかし、ラグビーの校庭に建立された銘板<sup>13)</sup>によると、ウィリアム・ウェブ・エリス(William Webb Ellis) がボールを持って走ることによってラグビーの競技上での歴史をつくったのは1823年であった。この出来事の全体の状況が1895年にラグビー校OB会の小委員会によって調査された。その小委員会は H. F. Wilson, H. H. Child, A. G. Guillemard そして H. L. Stephen で構成されたが、小委員会は主として次の

ように結論づけている。

1. 1820年にラグビーで行われていたフットボールの形態は、現在ラグビーフットボールとして知られているものよりアソシエーションに近いものであった。
2. 1820年から1830年のある日にボールを持って走るという革新が導入された。
3. これはあらゆる可能性からみてブロクサム氏(Bloxam)がその考察を帰したウィリアム・ウェブ・エリス氏によって1823年後半になされ、彼の不公平な行為は(ハリス氏によると)当時の世評の種であった<sup>14)</sup>。

小委員会による調査結果は1897年に The Origin of Rugby Football の表題の冊子で発刊されたが、その主たる証拠は1813年から1820年までラグビーに在籍したマシュー・ブロクサムによるものであった。彼に言わせれば、彼のラグビー在籍時代のフットボールのゲームは明確なフットボールであってハンドボールではなかった。

全員が校庭に集まると一番巧いプレーヤー2名が各チーム約20名を選び始める。残りの下級生については、多少大雑肥な分配が行われ、半数は一方のゴールの守備にまわされ、残りの半数は同じ目的で反対側のゴールにまわされる。特に選ばれなかった下級生は誰でも自分の属するゴールの側で守ることができた。

これらのうち、取っ組み合いに参加するのに用意万端にあるものもいたし、よくある偶然のキックの機を狙って判断よく半分後方にとどまっておくものもいた。ゲームの規則は数も少なく簡潔であった。グラウンドの両側のタッチは区分されボールを手にして相手ゴールに向かって走るのは許されなかった。これはハンドボールでなくてフットボールであったし、ハッキングでは大流行だったが組み打ちはほとんどなかった<sup>15)</sup>。

このあとエリスがボールをキャッチして、キャッチするために後退せずに前方にボールを持って走るという1823年の出来事が生じた。——この時すでにグロクサムはラグビーを卒業していたが、その状況に精通しており、彼の記述は確証のあるものであった。エリスの同時代の多くの者は、例えばハリスはエリスの行為を不公平とみなした。ハリスはエリスの3年後1828年にラグビーを卒業した。次のように記している。

ボールを拾いあげることと手にボールを持って走ることは完全に禁じられていた。地面もしくは手からはね返ったボールをキャッチしたプレーヤーは‘ドロップ・キック’を行うために2～3歩とってよかった。；相手プレーヤーから妨害を受けるのはもちろんであった。私はウィリアム・ウェブ・エリスを完全に覚えている。彼は優秀なクリケットの選手であったが、一般的にはフットボールで不公平な利益を得たとされている。私はいずれにせよ、彼を権威として引き合いに出すべきではなかった<sup>16)</sup>。

しかし、次の20年の間で、プレーヤーたちは敵陣突破(running in)の遂行に懸命になった。ラグビー校OB会の小委員会がラグビーのフットボールの起源について調査している期間、皇后陛下の裁判官の1人であったトーマス・ヒューズ自身は、自分の時代には敵陣突破は完全には禁止されていなかったと述べており、敵陣突破はある制限つきで、ヒューズ自身がビッグ・サイド(Big Side)<sup>17)</sup>のキャプテンを務めた1841—42年に公けに認められたという重要な知見を加えている。

私が入学した最初の年の1834年、ゴールにタッチ・ダウンしてトライを得るためにボールを持って走るのには完全に禁止されてはいなかったが、当時のラグビーの陪審が、敵陣突破して生徒が殺害されても、‘正当化すべき殺人’の評決を下したのはほ

とんど確実であろう。その行為が増大し、そして益々黙認され、事実、偉大なる敵陣突破の実践者であるJem Mackieの妙技から1838—39年にポピュラーになった。……Jemは肩の筋骨たくましく極めて俊足であった。それ故、彼がボールをつかんだら、彼の突進を阻止するのは極めて困難であった。従って、彼はその当時最も刺激的な試合においては、数的にそして極めて弱い側の学校寮と第6学級の生徒であった。彼は晩年はKircudbrightshireの下院議員で極めて有益で寡黙なメンバーであった。

我々が初めからずっとそれを決めた(我々が信じたように)、1841—42年に私がビッグ・サイドのキャプテンであった時、その問題は未決定のままであった。‘敵陣突破’は次の制限をもって合法であった。(1)ボールはワン・バウンドしなければならない。(2)ボールをキャッチするプレーヤーは‘オフ・サイド’でないこと、(3)ボールの‘手渡し’は許されず、ボールをキャッチしたプレーヤーはボールを運んでみずから‘タッチ・ダウン’しなければならない。地面にあるボールを拾い上げるのはオフ・サイドからの敵陣突破同様、完全に不当である。——‘オフ・サイド’にあるプレーヤーによってキャッチされたボールはただちにノック・オンされなければならない。そうしないと、ボールを保持しているプレーヤーを手荒く扱ってよい。；そして、如何なるボールの手渡しも許されなかった<sup>18)</sup>。

しかし、充分奇妙なことであるが、ヒューズはウェブ・エリスのことを一度も耳にしたことがなかったのである。Tom Brown's Schooldaysにおいて描写された状況は敵陣突破がなされていない1830年代のある年であるのは疑いが無い。事実、それは1823年以前になされたような古いゲームの描写であった。

ラグビー校OB会の小委員会によるラグビーのフットボールの起源についての調査の状況は若干興味深い。モンタギュー・シェアマン (Montague Shearman) は、The Badminton Library of Sports and Pastimes の Athletics and Football (1887) において、ラグビーで行われていた類のフットボールは原始的なゲームの遺物であると示唆している。

ある1つの学校だけが、ほとんどその設立から充分な広さを持つ広大な屋外の芝の運動場を所有していたようであるが、その学校はラグビーであった。；このことから考えると、どうも我々が予期すべきであったように、ラグビーにおいてのみ創始のゲームがその原始的形態をほとんど残したらしい<sup>19)</sup>。

ラグビー校OB連は、このシェアマンの示唆をラグビーのゲームが長い歴史を持つ証拠として歓迎するどころか、それはラグビー校OBの相談にあずからぬ資料によるものとして憤慨した。従って、ラグビー校OBは多分にその全員が当然であるとするハンドリングではラグビーで考案されたことを証明するための調査に着手した。そこでウエブ・エリスなる人物を発見したのは当然、疑う余地のないことであった。しかし、シェアマンが結局のところ正しかったと考えるのは興味深い。というのは、ハンドリングはフットボール自体と同程度に古く、エリスが有名な行為をなしたとされる1823年にはボールを手で扱うのは東アングリア、コーンウォール、そしてスコットランドにおいて確立されていたからである。エリスのボールを持って走った行為は、ノイベーションというよりは、むしろ古い慣習の復興であり、ラグビーではなされていなかったが、他の土地では手でボールを扱うのは一般的であった。しかし、この状況においてでさえ、エリスは歴史的人物であった。というのは1823年から次の20～30年で他の多くのパブリックス・スクールのためにスポーツの様式を決定する運命にあったラグビーにおいてエ

リスがボールを持って走ったとされることは、応範囲に及ぶ影響があったからである。エリス、もしくは彼のような人物の存在なしには、現代のラグビーの規則は決して発達しなかったであろう。

## 結

ここでは、19世紀初頭における英国パブリック・スクールのフットボールのゲームについて考究してきたが、パブリック・スクールは各々独自の形態でフットボールのゲームを行っており、それには主として2つの形式があった。

つまり、第1の場合、チャターハウスのゲーム、イートンのウォール・ゲームやフィールド・ゲームそしてウインチェスターのゲームのようにそれらのゲームを何か独特のものにした異例な条件のもとに全く独自に発達してきたが、それでもフットボールの基本的要素を備えたゲームであった。第2の場合、ウエストミンスター、ハーロー、シュリューズベリー、そしてラグビーのフットボールのゲームのように、諸々の間であまり大差のない方法で、そして通常の面積をもったフィールドで行われた現代のフットボールの先駆であるノーマル・フットボールと称されるゲームであった。

## 註及び引用・参考文献

- 1) E. P. Eardley-Wilmot and E. C. Streatfield, Charter house Old and New, pp. 74-76, 1895, quoted in Magoun, History of Football from the Beginning to 1871, pp. 81-82. (原典: The cloister, a species of tunnel paved with smooth flagstones, but roughly consulted with sharp, jagged flint at its sides, was about 70 yards long, 9 feet wide, and 12 feet high. It was supported by horizontal iron bars, and had a number of buttresses facing outwards or to Upper Green, with large square windows. In the middle it opened out east and west, and formed a little square called Middle Briers. The whole cloister extended from Gownboys to the Gownboy Dining Hall. At the north end there was a narrow

entrance leading into Gownboys; at the south, a small door leading out on to Green. On Wednesday afternoons a written notice, 'All Fags to be in Cloisters at 2. 30', used to be posted up on the principal archway, Say that the match was to be between Gownboys v. Rest of School. At the appointed time the Fages would assemble and take up their position twenty strong at each end of Cloisters: the Gownboy Fags, at the door leading to their own House; the Rest-of-School-Fags, at the south door leading on to Green. The boys of the higher forms would then range themselves down Cloisters. The football being started from Middle Briers. As may naturally be supposed. The ball very soon got into one of the buttresses. When a terrific squash would be result, some fifty or sixty boys huddled together, vigourously 'roughing', kicking, and shoving to extricate the ball. A skilful player, feeling that he had the ball in front of his legs, would patiently bide his time, until, perceiving an opportunity, he would dexterously work out the ball and rush wildly with it down Cloisters towards the coveted goal. The squash would then dissolve and go in pursuit. Now was the time for the pluck and judgement of the Fags to be tried. To prevent the ball getting in amongst them at the goal, one of the foremost Fags would rush out and engage the onset of the dribbling foe, generally to be sent spinning head over heels for five yards along the stones. It served a purpose, however, for it not only gave his side time to come up, but also his fellow Fags encouragement to show a close and firm front. If the boy with the ball happened to be well backed up by his own Houses, they would launch themselves right into the middle of the Fags, when a terrific scrimmage would ensue. The Fags would strive their utmost to prevent the ball being driven through, and hammer away with fists at hands grasping the corners of the wall to obtain a better purchase for shoving. One of these scrimmages sometimes lasted three-quarters of an hour. Shins would be kicked black and blue; jackets and other articles of clothing almost torn into shreds; and Fags trampled

under foot. At the end, amid wild shouts of 'through', 'through', nearly the whole contending mass would collapse on the ground, when the ball would be discovered under a heap of prostrate antagonists, all more or less the worse for the fray.)

- 2) A. H. Tod, Charterhouse, 1900, p. 154, quoted in Eric Dunning and Kenneth Sheard, *Barbarians, Gentlemen and Players*, Martin Robertson, 1979, p. 57. (原典: a good many broken shins, for most of the fellows had iron tips to their very strong shoes, and some freely boasted of giving more than they took.)
- 3) R. E. Macnaghton in Serarman, pp. 36-48: C. R. Stone (ed.), *The Eton Glossary* (ed. 1923): pp. 39-41, quoted in Marples, *A History of Foothall*, 1954, p. 112.
- 4) H. C. Adams, *Wykehamica: A History of Winchester College and Commoners*, 1878, pp. 366-367, quoted in Eric Dunning and Kenneth Sheard, *op. cit.*, p. 57. (原典: An oblong space was marked out ...fenced...by a row of juniors, who stood side by side for the entire distance, and whose bussiness it was to prevent the ball from escaping. At either end, in the centre of the open space, a boy was placed who stood with outstretched legs, and a gown rolled up at either foot: he was called the 'goal'.)
- 5) J. E. Vincent in Shearman, pp. 74-84: *Rules of Football as played at Winchester College* (ed. 1929): R. G. K. Wrench, *Winchester Word Book*, 1901, quoted in Marples, *op. cit.*, p. 111.
- 6) *Ibid.*, pp. 92-95, quoted in Eric Dunning and Kenneth Sheard, *op. cit.*, p. 55 (原典: The small boys, the duffers and the funk-sticks were the goalkeepers, twelve or fifteen at each end, ...if any fellow who was playing out showed any sign of 'funk', he was packed off into goals..., not only for that day, but as a lasting degradation. But...if any goal-keeper made a good save...or made a plucky attempt to tackle..., he was called for immediately to play out, and thenceforth played out always... A bully was formed in the middle... and the ball was thrown in between the lines; then

there was a general shinning match till it worked out. No off-side play was allowed...Handling... was allowed, but only to this extent: you might not pick a ball up from the ground, or after first bound was over, but you might catch it before or after first bound if fairly in the air; and you might then, if...not previously charged, and knocked head over heels, take two or three paces..., sufficient for a half-volley kick off the hand. You might not 'punt' it from the hand—that is, kick it full volley—or drive it with your fist... there were perpetual rough-and-tumble bullies...In these...shinning was allowed, and many a hack one got. Shin-guards were unknown...The boys in goals had a cold time of it...jackets on, but no caps, and hands deep in their pockets. There was no 'time' or changing of ends, and the only break in the game was at a goal or before a kickout...when I first came running with the ball (Rugby fashion) was allowed, and 'fist-punting' when you had the ball in hand...when running like this, the enemy tripped, shinned, charged with the shoulder, got you down and sat upon you in fact, might do anything short of murder to get the ball from you. I think that this running and 'fist punting' was stopped in 1851 or 1852.)

- 7) Rev. H. J. Torre, *Recollections of Schooldays at Harrow*, 1890, p. 13, quoted in Marples, op. cit., p. 113.
- 8) P. H. M. Bryant, *Harrow*, 1936, quoted in Marples, op. cit., p. 113.
- 9) G. V. Fisher, *Annals of Shrewsbury School*, 1899, pp. 149-167, quoted in Marples, op. cit., p. 114.
- 10) Thomas Hughes, *Tom Brown's Schooldays*, (ed. 1985), pp. 93-94. (原典: But now look, there is a slight move forward of the School-house wings; Old Brooke takes half a dozen quick steps, and away goes the ball spinning towards the School goal; seventy yards before it touches ground, and at no point above twelve or fifteen feet high, a model kick off; and the School-house cheer and rush on; the ball is returned, and they meet it and drive it back amongst the masses of the School already in motion. Then the two sides close, and you can see nothing for minutes but a swaying

crowd of boys, at one point violently agitated. That is where the ball is, and there are the keen players to be met, and the glory the hard knocks to be got: you hear the dull thud of the ball, and the shouts of 'Off your side', 'Down with him', 'Put him over', 'Bravo'. This is what we call a scrummage, gentlemen, and the first scrummage in a School-house match was no joke in the consulship of Plancus.)

- 11) Thomas Hughes, op. cit., p. 95 (原典: Here comes two of the bull-dogs, bursting through the out-siders; in they go, straight to the heart of the scrummage, bend on driving that ball out on the opposite side, That is what they meant to do. My sons, my sons! you are too hot; you have gone past the ball, and must struggle now right through the scrummage, and get round and back again to your own side, before you can be of any further use. Here comes young Brooke; he goes in as straight as you, but keeps his head, and backs and bends, holding himself still behind the ball, and driving at furiously when he gets the chance. Take a leaf out of his book, you young chargers.)
- 12) Thomas Hughes, op. cit., pp. 96-97 (原典: School leaders rush back shouting 'Look out in goal', and strain every nerve to catch him, but they are after the fleatest foot in Rugby. There they go straight for the School goal-posts, quarters scattering before them. One after another the bull dogs go down, but young Brooke holds on. 'He is down'. No! a long stagger, but the danger is past; that was the shock of Crew, the most dangerous of dodgers. And now he is close to the School goal, the ball not three yards before him. There is a hurried rush of the School fags to the post, but no one throw himself on the ball, the only chance, and young Brook has touched it right under the School goal-posts.)
- 13) O. L. Owen, *the History of the Rugby Football Union*, Playfair Books, 1955, p. 15.

This stone commemorates the exploit of William Webb Ellis, who, with a fine disregard for the rules of bootball as played in his time, first took the ball in his arms and run with it, thus originating the

- distinctive feature of the Rugby game. A. D. 1823.
- 14) D. L. Owen, op. cit., p. 29. (原典：1. In 1820, the form of football in vogue at Rugby was something approximating more closely to Association than what is known as Rugby Football to-day. 2. That at some date between 1820-1830 the innovation was introduced of running with the ball. 3. That this was in all probability done in the latter half of 1823 by Mr. W. Webb Ellis, who is credited by Mr. Bloxam with the invention and whose 'unfair practice' were (according to Mr. Harris) the subject of general remark at the time.)
- 15) W. H. Rouse, A History of Rugby School, 1898, p. 246, quoted in O. L. Owen, op. cit., p. 24, (原典：When all had assembled in the Close, two of the best players in the school commenced choosing in, one for each side. After choosing in about a score on each side, a somewhat rude division was made of the remaining fags, half of whom were sent to keep goal on the side, the other half to the opposite goal for the same purpose. Any fag, though not chosen in, might follow up on that side to the goal of which he was attached. Some of these were ready enough to mingle in the fray; others judiciously kept half-back, watching their opportunity for a casual kick, which was not unfrequently awarded them. Few and simple were the rules of the game; touch on the sides of the ground was marked out and no one was allowed to run with the ball in his grasp towards the opposite goal. It was football and not handball, plenty of hacking but little struggling.)
- 16) O. L. Owen, op. cit., p. 28. (原典：Picking up and running with the ball in hand was distinctly forbidden. If the player caught the ball on a rebound from the ground, or from a stroke of the hand, he was allowed to take a few steps so as to give effect to a 'Drop-kick', but no more; subject, of course, to interruption from the adverse players. I remember William Webb Ellis perfectly. He was an admirable cricketer, but was generally regarded as inclined to take unfair advantages at football. I should not quote him in any way as an authority.)
- 17) 上級生全員もしくは大多数の参加する大人数同士の試合
- 18) O. L. Owen, op. cit., pp. 26-27. (原典：In my first year, 1834, running with the ball to get a try by touching down within goal was not absolutely forbidden, but a jury of Rugby boys of that day would almost certainly have found a verdict of 'justifiable homicide' if a boy had been killed in running in. The practice grew, and was tolerated more and more, and indeed became rather popular in 1838/39 from the prowess of Jem Mackie, the great 'runner in'. Jem was very fleet of foot as well as brawny of shoulder, so that when he got hold of the ball it was very hard to stop his rush. He was a School House and Sixth Form boy, therefore, on the numerically and absurdly weak side in those most exciting matches of that time. He was M. P. for Kircudbrightshire in his later years and a very useful but silent member.
- The question remained debatable when I was captain of Bigside in 1841/42 when we settled it (as we believed) for all time. 'Running-in' was made lawfaul with these limitations (1)that the ball must be caught on the bound, (2)that the catcher was not 'off his side', (3)that there should be no 'handing on', but the catcher must carry the ball in and 'touch down' himself. Picking up on the ground was made absolutely illegal, as was running in from off your side—a ball caught by a player 'off his side' must be at once knocked on or the holder might be mauled; and no handing on was allowed.)
- 19) Ibid., p. 272 (原典：One School alone seems to have owned almost from its foundation a wide open grass playground of ample dimensions, and that school was Rugby; hence it happens, as we should have expected, that at Rugby School alone do we find that the original game survived at most in its primitive shape.)